論文内容の要旨

東北大学大学院経済学研究科

B3ED1003 徐寤

本論文の課題は、近世日本における仙台薬種仲間の事例分析を行い、全国市場に組み込まれた藩領域市場において独自の流通機構として機能した地方株仲間の特性を歴史的に明らかにすることである。

株仲間論は、かねてより多くの研究が蓄積されてきたテーマである。我々は、優れた研究成果を、戦前商業史の研究、戦後進展した流通史の研究、近年注目されるようになった都市史の研究のなかに発見することができるが、それらのほとんどは、「三都」と呼ばれた京都・大坂・江戸の株仲間を中心に論じている点で共通している。

ところで、近世市場経済形成期の担い手として商人や株仲間を論じる場合、もちろん三都株仲間を軸に検討することは重要な意味を持つが、同時に遠隔地間交易の担い手として登場する商人特権組織として地方株仲間という組織の存在にも関心がよせられるべきであろう。実は、十七世紀後半以降、城下町の日用品・奢侈品需要が増大し、十八世紀以降になると、特産物市場の形成を背景として、各地の地方株仲間が、領内と三都市場を結び流通機構を作り上げながら、同時に地方領国間の商品流通にも重要な役割を果たしていくことになった。このような市場経済活動の担い手として行動する地方株仲間の様相は、当然のことながら、中央の三都株仲間のそれとは大きく異ならざるをえない。実は、この点の解明こそが本研究が取り扱うもう一つの課題である。日本各地におけるこのような地方株仲間の活動は、問題関心の不足と史料的な制約から、現在においてもなお十分な検討が行われているとは言いがたい状況にある。しかし、仙台薬種仲間の事例分析はそのような検討課題に対する答えの一つを提示してくれる。本研究の研究史上の意義の一つであろう。

これまでの流通史・藩政史・地方史などの諸研究成果に基づいて、地方株仲間は、領主権力との関係や地域固有の市場構造などに大きく規定されており、結果として幕領内の三都株仲間とは大きく異なる様相を呈することとなった事実を指摘することができよう。ここから、本稿で三都株仲間と区別して地方株仲間を取り上げる理由を明らかにしてみたい。

さらに、本稿では、これまでの公的権力と結びついた株仲間の検討とは異なる面、すなわち、市場対応的機能を果たす株仲間の活動に着目し、仙台薬種仲間の事例分析を行い、そこから地方と三都株仲間の相違は一層明らかにすることができる。これによって、地方株仲間の持つ独自の形態・機能を論じる作業をさらに前に進めよう。

以上のような検討を遂行するため、まず第1～4章を通じて、市場に対応した機能集団としての仙台薬種仲間の事例分析を行う。具体的には、仙台薬種仲間文書（「小谷文書」）を利用し、万治2（1659）年から幕末までの市場経済の展開と変容とあいまって、仙台薬種仲間は、市場組織として結成されることによって、特権の獲得・確保・行使のみならず、公的権力から離れたところに、多様な集団活動を加え、市場対応的機能を果たすことになった実態を明らかにしてみる。各章で明らかになった事実を整理しなおし、市場に対応した機能集団としての薬種仲間の行動様式と特性がどのようなものであったのかを、下記のように論じてみることにする。

第一に、近世市場経済の変化につれて、市場組織として運営された薬種仲間の多様な結成要因、すなわち、仕入薬種・「薬種附品」の流通問題、和薬の集荷と輸出問題、商人荷物の共同運送に関わる薬種仲間の成立と再編成といった経緯が明らかになった。組織結成の特性は、その成立初期から幕末まで、商人荷物の共同運送における仲間の結合関係の著しい強さが指摘できる。薬種仲間は薬種商人の機能集団であるとともに、多業種商人の連合体として仕入荷物の共同運送に関わる組織機能を果たしたのである。そこでは日本の国産砂糖の増産・砂糖取引の活発化という列島内全体の市場動向を背景に、天保年間以降「薬種仲間」内部構成における砂糖商人の著しい増加がみられた点が歴史的特徴として指摘されなければならない（第1章）。

第二に、仲間成立初期から幕末まで、安全・安定・低額・確実・便利・円滑な荷物の共同運送を図り、商人の拡大しつつある遠隔地取引活動を支える薬種仲間の市場機能がもっとも顕著に果たされていたことが見出される。商人の共同運送に関わる薬種仲間の行動様式について、多様な輸送方式の調整、商品の保管・包装・荷役関連機関の整備、運送事故を処理する組織仕法の形成が明らかとなった。特に元禄8（1695）年頃以降、続発する海難の損失に悩んでいた薬種仲間商人は、石巻穀船運送システムを構築し始め、商船の代わりに藩の廻米運送船の利用を選択した。ここから、運送問題を解決するために薬種仲間が大きく機能したという特性が確認できる。その後、下り荷の運送システムを構築しようとする仙台薬種仲間の一連の動きは、組織内商人の結合のみならず、仙台城下古手・繰綿・小間物仲間商人との連携、江戸奥積問屋住吉講・鹿島講との結合へと展開していったのであり、その意味で、運送機能が仲間の特筆すべき特徴であるといえよう。文政年間以降、その積合仲間に仙台太物仲間、南部商人、伊達梁川住吉講商人の加入も見られ、さらに下り荷の石巻穀船運送システムの延長線で、寛政2（1790）年頃から領外移出和薬の穀船運送を実現した動きから、商人の確実・安全な和薬の移出活動を支える仲間機能の拡大という変化を指摘することができよう（第4章）。

第三に、領外仕入の薬種・「薬種附品」の流通問題について、人参と砂糖の例を取り上げ、国産品の輸入品代替化という全国的市場動向の中で、仙台薬種仲間は市場組織として、仲間商人の直面した新しい商業問題の解決に取り組む行動様式とその特性が明らかになった。まず、人参の例を通じて、輸入唐薬仕入の依存から和薬生産・流通の拡大に転換する薬種市場動向の中で、領外仕入薬種の集荷確保・領内の一手販売に取り組む薬種仲間の行動様式とその変化がみられる（第2章第1節）。次に、天保年間以降薬種商人の重要な商売内容となった砂糖の例では、国産砂糖の輸入砂糖代替化という全国市場動向の中で、砂糖消費地に位置する仙台薬種仲間商人はいかに仲間組織を結束し、砂糖仕入・販売活動の拡大を図っていたのかが明らかとなった。ここから、国産砂糖市場が形成する中で、砂糖取引規模、また砂糖海上運送の事情の相異を原因に、仙台・江戸・大坂薬種仲間は、異なる組織行動をみせるようになった。すなわち、大坂諸砂糖専門問屋の整備（砂糖流通における大坂唐薬問屋の地位低下）、江戸薬種仲間における砂糖問屋商人の独立と対照的に、天保7（1836）年以降、砂糖の独占仕入と共同運送に関わる仙台薬種仲間商人の結合とその規模拡大が特徴づけられる（第2章第2節）。

第四に、仙台薬種仲間は、18世紀以降国内和薬市場の形成に対応した機能集団として、領外に移出される和薬の集荷・出荷問題に関わる仲間組織の行動様式、またそれに関わる組織機能とその限界性が浮き彫りになった。まず、産地に位置する仙台薬種仲間の行動様式について、和薬産地開拓の参入（必要な技術と資金の提供）、仲間内集荷仕法（生産共同調査・集荷価格決定）の形成・調整、和薬流通特権（集荷・移出の独占権）の取得・確保、仲間外商人の和薬集荷・移出の取締が特徴づけられる。この一連の組織行動を通じて、仲間商人の和薬集荷・移出の独占を支える組織機能がみられるとともに、薬種国産化初期領内和薬産地の形成、流通秩序の安定化における薬種仲間の役割を見逃すことはできない。一方、和薬産地のさらなる成長・市場の飛躍的な拡大とあいまって、これまで維持されてきた和薬流通秩序における薬種仲間地位の後退をもたらし、組織機能のもつ限界性があらわれてきた。領内和薬生産規模に見合った集荷・出荷の組織仕法を改めて作り上げることができなかったこと、仲間内集荷体制の崩壊という組織の内部要因に加えて、財政収入の増加を目的に薬種仲間の和薬流通特権を否定した国産仕法を実施せざるをえなかったこと、公権力の放任による産地和薬の自由売買が生まれたこと等も重要な原因であろう。要するに、流通特権の利用を通じて集荷独占・移出取締を図る薬種仲間機能が低下したのであった。（第3章）。

以上薬種仲間の事例分析をもとに、仙台北下株仲間全体の構造変化を概観し、近世地域的市場ないし全国市場構造の変化に組込まれる地方株仲間の様相を部分的に検討して見る。第一に、仕入荷物の共同輸送を図る仙台北下積合仲間の動向（第4章）から、菱垣廻船・樽廻船のような商船のかわりに、領国的運送機構を活用することによって、安全・低額・確実・便利・円滑な荷物の輸送を図る地方仲間機能の特性が示唆された。第二に、取扱う品目別に編成され、その専門性に特徴される中央株仲間と対照的に、地方株仲間は領域市場の取引規模や運送事情に規定され、複数の商品流通・運送に結びつく組織機能が同時に持ち込まれる傾向が見出される。第三に、仙台北下「六仲間」の構成は、一般にみられる株仲間の人数制限（×株化）が見当たらない。そこから、地方株仲間が独自の仕法を考案し、従来の市場地位の維持を図る行動様式が提示され、多様で複雑な地域性に特徴づけられた地方株仲間の多様性を見いだすことができよう。第四に、特権の取得と行使は、仲間の市場対応的機能を果たすための手段と考えると、藩権力と結びつく地方株仲間は、それぞれ異なる商業政策・領国専売制と関わるため、そこからその形態と機能の多様性を見いだすことができよう。

本稿はあくまで仙台の個別事例の研究にとどまっている。本稿では充分展開できなかった地方株仲間に通じた性格の解明、多様で複雑な地域性に特徴づける地方株仲間の類型化の作業など、大きな検討課題として残されている。